



2014年アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東田, 卓, 金田, 忠裕, 早川, 潔, 鯨坂, 誠之, 吉田, 壘, 栗田, 佳代子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007544

2014 年アカデミック・ポートフォリオ 作成ワークショップ報告

東田卓^{*1}, 金田忠裕^{*2}, 早川潔^{*3}, 鯨坂誠之^{*4}, 吉田壘^{*5}, 栗田佳代子^{*5}

A Report on the Workshop of Academic Portfolio in 2014

Suguru HIGASHIDA^{*1}, Tadahiro KANEDA^{*2}, Kiyoshi HAYAKAWA^{*3},
Shigeyuki AJISAKA^{*4}, Lui YOSHIDA^{*5} and Kayoko KURITA^{*5}

要旨

大阪府立大学工業高等専門学校では、教育改善の一環として2009年よりティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ (TPWS) を開催している。さらに、2012年からはティーチング・ポートフォリオ作成者を対象として、アカデミック・ポートフォリオ作成WSを同時に開催している。さらに2014年12月から新規に構造化アカデミック・ポートフォリオ(SAPWS)が開催された。本稿では、2014年度のアカデミック・ポートフォリオ作成WSの概要を説明した後、ワークショップ参加者の感想を報告し、最後に初めての試みとなったSAPWSの報告を行う。

キーワード: アカデミック・ポートフォリオ, 教育改善, 統合

1. はじめに

大阪府立大学工業高等専門学校 (以下、本校と略す) は教育改善の一環として2009年よりティーチング・ポートフォリオ (以下、TP と略す) の作成に取り組んでいる。これに対してアカデミック・ポートフォリオ (以下、AP と略す) とは、「教育、研究、サービス活動 (社会貢献・管理運営等) の業績についての自己省察による記述部分およびその記述を裏付ける根拠資料の集合体であり、教員の最も重要な成果に関する情報をまとめた記録」である[1]。

2012年1月4~6日に大学評価・学位授与機構小平本部でAP作成ワークショップが開催された。このときの手法を踏襲して、2012年以降から連続して本校でAP作成ワークショップを開催してきた[1]。2014年度に本校で第6回及び第7回のAP作成ワークショップ (以下、WS と略す) を開催したので報告する。

2. アカデミック・ポートフォリオについて[2]

今回はAPと昨年から開始した大学院生版AP (GSAP), ならびに新しく構造化アカデミック・ポートフォリオ(SAP: Structured Academic Portfolio)の作成ワークショップが初めて同時開催された。ここで簡単にAPとSAPの違いをまとめる。

APWSは事前にTPを執筆した人を対象に2泊3日でAPを完成させるWSである。APの最大の特徴は、教育・研究・サービス活動、互いの連携・寄与について考察する「統合」の章にある。また、これまでの成果から最も自分が誇りに思うものを3つあげて記すこともAPの大きな特徴である (これは、教育1つ、研究1つ、サービス活動1つと決まっているわけではなく、教育を重要視する教員ならば教育から3つ選ぶ等、教員の活動スタイルにあわせることができる)。さらに、将来達成したい目標を3つ記す点も単純な「業績リスト」と大きく異なる点である。これらを十分な自己省察を行いながら記述していく[1, 2]。

それに対してSAPWSでは事前課題であるSAPチャート (後述 図1) を作成しておき、SAPの基本構成の明確な提示することによって、事前にTPWSにてTPを書き上げなくても2泊3日のWSで完成させることが可能となる。APもSAPも方法論は違えど完成し

2015年8月18日 受理

*1 総合工学システム学科 環境物質化学コース (Dept. of Technological Systems: Environmental and Materials Chemistry Course)

*2 メカトロニクスコース (Mechatronics Course)

*3 電子情報コース (Electronics and Information Course)

*4 都市環境コース (Civil Engineering and Environment Course)

*5 東京大学 (The University of Tokyo)

たAPには差異はなく、同一の成果物である。

今回は初めてAPのワークショップ3つ（AP, GSAP, SAP）を同一会場で行った。それぞれのメンティー、メンター、スーパーバイザーは表1に示した。

3. 作成ワークショップ

2014年度は本校では2回のTP・AP・SP作成WSを行った。そのうちAP（GSAP, SAPも含む）作成WSのメンバー概要を表1に、WSの主なスケジュールを表2に示した。昨年度は試験的にホテルを利用したワークショップを行ったが、今年度はこれまでどおりすべて本校で行った。

表1 2014年度に開催したAP作成WSの概要

回	日程	メンティー	メンター	スーパーバイザー
6	8月6日～8日	1名（学内）	1名（学外）	竹元仁美
7	12月25日～27日	5名（学外） GSAP2名 SAP4名	5名（うち学外2名）	山川修（AP） 栗田佳代子（GSAP, SAP）

表2 AP作成WSのおもなスケジュール

	12月25日	12月26日	12月27日
午前		個人ミーティング(2) AP作成作業	個人ミーティング(4) AP作成作業
午後	オリエンテーション APシート作成 個人ミーティング(1) AP作成作業	個人ミーティング(3) AP作成作業	AP作成作業 プレゼン準備 APプレゼンテーション 修了式
夜間	夕食会 AP作成作業	夕食会 AP作成作業	

4. AP作成の実際

4.1 メンティーとして

早川潔 2009年に初めてTPを書いて、その後、教育業績の他に研究やサービス活動の業績も積んできた。2015年は本校に赴任して10年目と節目にあたるので、APを書くことによって、教育だけではなく、研究やサービス活動についても省察し、今後の活動に活かしたいと思い参加した。

今回参加してみて、2のことがわかった。1つは教育・研究・サービス活動の移り変わりや関連性が明確になったことと、2つめは、今後の教育・研究・サービス活動が見えてきたことである。

前者に関して、教育・研究・サービス活動の活動が互いに関連し、且つ時間軸で活動が移り変わっているのが見えてきた。AP作成作業の前に、TPの縮小版を作成したときには、2009年に比べていろいろなこと追加されていたが、関連性が見えてこなかった。APチャートを作成しながら、メンターの方と話したり、アドバイスをいただいていたりにしているうちに、関連性が見えてきた。初め、個人で行っていた活動が、グループでの活動になり、最近では他分野にまたがった融合的なグループ活動に発展していることに気づかされた。この気づきは、APチャートを自由に書くようメンターからアドバイスをもらったことによることが大きい。通常は、教育・研究・サービス活動の3相図が一般的だが、私の場合はそうではなかった。私の場合、3つの関係がスパイラルアップするような関係であることがわかった。

他分野でのグループ活動のきっかけは、奇しくもサービス活動を行った先生方との交流からである。一見、サービス活動と教育・研究は関係ないと思いがちだが、間接的ではあるが、サービス活動における教員交流は重要であると感じた。また、私みたいに運良く、教育・研究に結びつけばよいが、結びつかない先生の方が多いと思われる。そのためにも、新たな教員交流の場が必要ではないかと感じた。

後者に関して、今後はさらに広い視野に立って活動する必要があると感じた。私のコアでもある、最終的にはものづくりにおいて、社会に変革をもたらしたいという夢があった。だが、50歳近くなり、漠然な夢であるので、実現不可能と思っていた。それが、メンターのアドバイスにより、見方が変わってきた。今後は、学生の教育を軸にして、学生や企業を巻き込んで、ものづくりに関して、社会的な変革を起こしたいと思っている。

今回、APを作成することにより、いろいろなこと

に気づいた。また、改めていろいろな人に支えてもらって活動できているし、そのためのコミュニティー作りが大切だし、今後、私自身がそのコミュニティーを作って行ければと思っている。

鯨坂誠之 この度、2014 年の冬に AP のメンティーを経験させて頂いた。TP のメンターを 3 回経験した後で、そろそろ TP の更新を行う必要性を感じていた頃だった。そんな折、AP を書くためには、事前に TP の更新も行うことになっているとの話を受けたため、取り組むことにした次第である。

AP と TP の大きな違いは、TP で取り纏めた「教育」の自己省察に加え、「研究」や「サービス（管理運営・社会貢献など）」といった複数の活動にも焦点を当ててそれらを「統合」し、核（コア）となりうる要因を見つけ出すことにある。そして案の定、最も苦労したのはその要因を見つけ出す作業であった。

AP 作業の困難さは 2 通りあるように思う。

一つ目は、TP の時に「教育」で行ったのと同じように、「研究」や「サービス」についても同じくらいの慎重さで、自己省察をしなければならない点である。私の場合、一度 TP を経験していたため、「研究」や「サービス」についても同様のアプローチで事前のスタートアップシートを完成させたが、実はそれは片手落ちだと思っている。というのも、TP ではメンターとメンティーの対話によって「教育」の自己省察を行っているのだが、今回スタートアップシートを作成するための「研究」や「サービス」の自己省察ではその対話が行われていない。「教育」で試みた方法論を踏襲しているが、似て非なるものである。今回、この困難を乗り越えるために、AP のワークショップが始まってからなるべく早い段階でメンターと個人ミーティングを行い、スタートアップシートで準備してきた「研究」や「サービス」の自己省察に関する内容を対話によってバージョンアップするよう心掛けた。時間的な制約があるとはいえ、効率化を求めてここを省略してしまうと、この困難さを乗り越えられないのではないだろうか。TP と同様に、AP においてもこのプロセスは非常に重要であると考える。

二つ目は、「教育」「研究」「サービス」の相互関係だけを読み解いていても、コアとなる要因を見つけ出せない場合がある点である。要因を見つけ出すためには、それらの相互関係を捉えた上で、もう一捻り「何か」が必要であり、その「何か」に基づく思考の飛躍が必要である。私の場合、全く別の視点から自分の現在の

趣味を取り上げ、その趣味で用いられている専門用語の意味と、「教育」「研究」「サービス」の相互関係とを結びつけることによって、コアを見つけ出すことが出来た。つまり、私の場合は「何か」を「趣味」と捉え、そこから思考を飛躍してコアを見つけ出したのだが、人によってこの「何か」は異なると思われる。

今回、AP に参加して感じたことは、効率的に作業を進めていこうとすると見落としがちな部分がある（一つ目）、最終的にコアを見つけ出すためには、関係性を読み解くだけでなく思考の飛躍が必要である（二つ目）ということだった。今回は AP のメンティーとして参加させて頂いたが、いつの日か AP のメンターを行う際には、これらの点に留意しながら取り組んでいきたい。

吉川ひろみ 私がティーチング・ポートフォリオ（TP）を知ったのは 2008 年で、書籍を購入して一人で作成してみた。それなりに自分の教育活動を省察できたと思ったが、2014 年 9 月に TP 作成ワークショップで、メンター（金田忠裕氏）と共に TP を作成すると、自分のビジョンが垣間見えてきた。その 4 か月後の 12 月にアカデミック・ポートフォリオ（AP）作成の機会が得られ、さらにビジョンが明確になった。

一人で TP を作成した時は、20 年近くも教員経験がありながら、自分が教員であり続ける妥当な理由を見出そうとしていた気がする。ある教育方法では学生の反応はこうだったから、次は別の方法を試したという内容に留まっていた。TP 作成ワークショップでは、メンターから私の専門分野である作業療法についての説明を求められた。なぜこの分野に入り、今も作業療法を発展させようとしているのかをメンターに説明する中で、過去から現在までの社会情勢の変化、自身の成長を意識化することができた。

AP 作成ワークショップでは、教育に加え、研究と管理運営・社会貢献について情報を収集し、整理していくことで、多少のビジョンの変化とさらなる明確化が得られた。メンター（早川潔氏）による数少ない指摘、質問、コメントが、自身が無意識に設定してしまっていた枠を外すこととなった。異なる分野のメンターの必要性を実感した。また、2 日目に見せていただいたメンターの AP が、自分の AP 完成の助けとなった。AP 作成途中で、研究論文、依頼原稿、翻訳などをテーマ別、年代順に並べてみた。大学に提出する業績調査の内容を並び替えたただけだったが、研究者としての自分の位置がぼんやり見えてきた。管理運営・社会貢献については、本当に業務でしかないものと、自分のビジョン実現に関連するものとの区別ができた。

私が勤務する県立広島大学では、2013年に栗田佳代子氏による講演とミニワークショップを、2014年に大阪府立大学高専からメンター2名を招いてTP作成ワークショップを開催した。2015年もTP作成ワークショップを実施する予定である。多様な専門分野の教員が集う真のファカルティ・ディベロップメント文化を創っていききたい。

4.2 メンターとして

金田忠裕 この度、2014年の冬に大学院生版アカデミック・ポートフォリオ(GSAP; Graduate Student Academic Portfolio)[3]のメンターに加えて構造化アカデミック・ポートフォリオ(SAP; Structured Academic Portfolio)[4]のメンターをさせていただいた。SAPは従来のアカデミック・ポートフォリオ(AP; Academic Portfolio)に明示的に構造を与えたもので、その全体像を可視化するためのチャートに伴い、これと連動した形で項目が生成される。これにより、AP作成による活動の内省と展望が容易になり、普及に寄与することが期待されている。SAP参加者のポートフォリオから文章を抜粋する。

「この度のポートフォリオワークショップを通じた省察から、自己の多様なバックグラウンドを意義づけることができ、同時に、多様性、専門性、汎用性、個の重視が、実は相互に関係性を保って共存していること、それぞれの価値を追求することは他の要素の価値を追求することに結び付くことが分かった。ただし省察の時間は、伝統的な専門分野の専門性こそが大学教育の意義である、という確固とした信念を持っていた過去の自己に改めて出会う機会でもあった。この信念は、自己の多様なバックグラウンドを意識的・無意識的に批判的に捉えていたことの反映であった可能性もある。

しかし、多様性、専門性、汎用性、個の重視が、省察を通して拡大化されたバックグラウンドの中で、共存し、相互に強化し合える可能性に気付いた現在は、自己の将来における可能性と方向性により明確にコミットすることができるようになった。」

メンタリングでかなりの時間を割いたことは多様なバックグラウンドを如何にして意義のあるもので、関連があるかを考えてもらうものであった。文章からもその効果が読み取れることができ、効果的なメンタリングができていたと思う。キャリアが長く、現在の仕事に直接関係しないものはポートフォリオを作成する

上で、意味がないと考えがちであるが、その方のバックグラウンドを整理して、関連付けをしてもらうことが実は非常に重要であることに気が付いた。このことはGSAP参加者からも下記のようにポートフォリオで記載している。

「博士後期課程に入り、アカデミズムの世界でキャリアを形成しようと努力する中で、大きな障害となったのは、約4年半にわたる職業経験と、そこで得た技術や価値観を、現在の活動にどのように統合していくかという問題であった。より体系化した知の獲得と生産という点に魅力を感じてキャリアを変更した自分にとって、悩んだ末にキャリアを放棄することになった過去と向き合い、それを積極的に再評価し、今の自分の一部として認めることは負担の大きい作業であるが、職業人として前進するためには、必須の作業でもある。・・・(中略)・・・私の教育、研究、サービスに対する動機は、私自身の職業経験や価値観を強く反映したものであった。ただ、ポートフォリオの作成を通してそれらを確認し、コアの部分からこれまでの自分の活動を再整理したことは、これまで一貫性が低いと自ら考えていたキャリアを統合し、意義づけ、肯定するきっかけとなった。今後は、自分の中の多様性を、教育・研究・サービス活動において生かし、経験を役立てることで自らのキャリアを積極的に評価していくという、よい循環を作れるように努力したい。」

SAPのチャートはAPのこれまでの経験を元にプロセスを明瞭化するために構造化したものである。これまでの経歴の中で、影響を受けた出来事や人物、個人的なエピソードなど、全体的にかかるものについてはAPのチャート作成ですくいきれないものがあつた。そこでSAPのチャートでは、ふせんの種類をかえてチャート作成のプロセスの中に組み入れることにした。

しかしながら関連性の薄いものの中に自分では気づけなかったものがある場合も多く、やはりメンタリングが非常に重要な意味をもってくる。

この度のワークショップでは多様なキャリアをもつ方、キャリアを変更した方への支援をどのように行っていくべきかを考えさせられたものであつた。

東田卓 今年度、第7回では1名のAPメンターをさせていただいた。これまでメンティーは学外の方が多かったのであるが今回は学内の方のメンタリングであり、ご本人の取り組みだけではなくまた違った

角度から見た本校のあり方も垣間見え、メンタリングによるメンター自身の改善の他、学校における共通の様々な問題を見ることができた。

今回もいつも同様 AP チャートを作成していただく予定で、ポストイットにブレインストーミング形式でメンティーの取り組みを書き出していただいた。メンティーに KJ 法で自らの取り組みをピックアップ及び再構成していただいたのであるが、メンティー自身がブレインストーミングや KJ 法の熟練者であったので、自らの力で自己分析を進めていただいた。KJ 法のまとめ方も形式にとらわれない AP らしく自由な発想で振り返っていただいた。私はメンターとして寄り添ってお話に傾聴させていただいた。通常 AP は教育、研究、サービスの 3 つの分野の関連を見極め、3 点の共通点であるところの「コア」を見出すのが一般的であるが、従来の型に嵌った AP の概念にとらわれず、今回のメンタリングでは高専校務、社会貢献、学術研究、教育活動の四面から自らを分析され、時間軸で見据えながら今後の目標設定をされた。

同じ職場で働くものとして AP チャートを作成しながらメンター・メンティーを巻き込んだ学校における諸問題を掘り下げて考えることのできた貴重な経験でもあり、「伴走」におけるさまざまな発見もできた。また、メンティーは本校に赴任する前はデザインの現場でお仕事されていた関係で、私の知らない発想も多く持っておられてインタビューによって得るものがたくさんあった。通常の「AP チャート」にとらわれない AP 作成に戸惑いながらも、私はひたすらメンティーに傾聴しながら、気になったことを質問し繰り返すだけであったがそれらがうまくクロスするところが見出す「点」を見つけることができた。

AP のメンタリングに成功や失敗があるのか、合格点のメンタリングができたのかと自問自答することはあるが、なかなか常に満足の行くメンタリングはできない。AP を書き上げた方は是非一緒にメンターを体験して頂いて、より良いメンタリングについてメンターチームと一緒に考えていただければと思う。

今後も APWS の中でメンティー・メンターの相互の成長を図ることができればと願いたい。

早川 潔 今年度は、夏に AP のメンティーを経験し、冬に AP のメンターを経験することとなった。AP 作成から半年も経たないので、手順は明確に示すことはできたと思っているが、初めての AP メンターだったの

で、メンティーにいいアドバイスができていないのではないかと反省している。

今回のメンティーは経験豊富で私がアドバイスしなくともある程度は作成できるメンティーだった。TP 研究会では、初めてのメンターでも、苦労しないようなメンター・メンティーのマッチングをするよう心がけているので、初めてメンターをする方でも安心してもらいたい。

AP のメンターをするに当たって、TP の縮小版や AP のスタートアップシートを読んだが、異なる分野であるので、ぜんぜんわからないことだらけだったが、そのあたりはメンターミーティング時に聞くなりして、事前に準備できた。ただ、専門的なことはメンターミーティングでもわからないので、そのあたりはメンティーに聞くことにした。

今回のメンティーは、研究・教育・サービス活動を十分行われている方（しかもその分野では有名人）なので、あとはそれらの関係性からコアを見つける作業に重点をおくことになった。

コアを見つけるために、三相図を書くのだが、私の場合は一般的な三相図にならなかったのが、三相図にこだわることなく描くようにアドバイスした。そのアドバイスで多少混乱したせいかなかなかイメージがわかないようであった。通常、模造紙の中に、いろいろなイメージを描いていくのだが、そのことはあまりせずに、いろいろなお話を伺って、その中で関係性を見いだすことになった。その関係で、アドバイスというよりは聞き役に徹した。というよりかは、メンティーの話が上手で、興味のあることばかりだったので、自ずとそうなってしまった。この点は、もう少し、アドバイスができればと反省している。

話を聞いているうちに、メンティーが、研究・教育・サービス活動を示す図を描き、コアを示した。非常にオリジナリティあるメンティーらしい図ですばらしかった。AP 自体も非常に興味あるすばらしいものだった。

全体的な感想としては、もう少しアドバイスをしようがよかったと思う。ただ、あまりアドバイスをするとメンティーのオリジナリティを損ねる可能性があるのも、そのあたりのバランスを考えながら、今後のメンター活動に活かしたいと思っている。

4.3 スーパーバイザーとして

竹元 仁美 これまで所属大学や近隣大学での SV やメンター経験はあったものの、TPWS・APWS の第 2 の

メッカ、もしくは西の横綱とでもいうべき大阪府立高専における AP メンターおよび SV の役割は私自身の大きな学びの機会となった。

AP 作成には、現時点の自分を構成する原点に立ち返り、そこを基点としてさまざまな経験を積みながら現在に至った人生を、メンターと共に丁寧に内省するという過程が非常に重要である。それ故、メンター役割は、人生を振り返り自己と対峙するという、時には圧倒され、時にはしんどい「ライブ・レビュー」に寄り添うため、その一期一会の機会をメンティーが心から楽しむことができるように配慮することに尽きる。というのは、今回担当させて頂いたメンティーのように、TP メンター経験者であれば内的統制感が強く、メンターの質問やコメントをきっかけに大きく飛翔し、一気に全体を俯瞰することが可能となるからである。したがって、AP メンターはメンティーの最大の理解者かつ AP の熱心な読者でもありながら、2 日半という短い時間枠のなかで、メンティーの成長曲線を予測し、実際との進捗状況とのズレをいろいろなスキルを用いて調整する役割を担うこととなる。今回、その役割を果たせたか評価しなければならないが、現時点では最終日のメンティーの作成したすばらしい AP とはじけるような笑顔を成果としたい。

TP および AP のメンターチームのスーパーバイザーに関しては、北野先生はじめメンターチームの諸先生方、WS 参加者の方々の能力の高さ、温かさおよび参加者全体が織り成す大きな創造の場の力をお借りして、何とかお役を努めさせて頂いたというのが真相である。それでも言わせて頂けるならば、スーパーバイザー役割はメンティーとメンターの相互作用を注意深くモニターし、もし滞っている部分があったら刺激して活性化することである。通常、2 日半の WS において 4 回以上開催されるメンターチーム会議において、メンティーのポートフォリオ作成状況についての詳細なアセスメントとサポートの方向性が報告される。その双方の真摯な向き合いから生じているリフレクション過程を傾聴し、状況判断したことをお伝えしメンターの方角性を支持し後押しをすることである。その際に、技術的なコメントをできることが望ましいが、これは先天的・後天的を問わずメンターの持つセンスと経験知によるものと思われる。

最後に興味深い現象として、個々の参加者の能力の単なる総和ではない、WS という集合体（グループ・ダイナミクス）が発する場の創造力をあげたい。スーパーバイザーがこれを統制することができれば、WS の質の担保に大きな貢献ができる。今後、実践を重ねながら検証していく必要がある。

5. SAP について

今回 TP, AP, 大学院生版 AP (GSAP : Graduate Student Academic Portfolio) [3] の作成 WS に加え、GSAP から着想を得た構造化アカデミック・ポートフォリオ (SAP : Structured Academic Portfolio) [4] の第 1 回作成 WS (以下、SAPWS) を行った。メンター 3 名からなるメンターチーム（うち 1 名はスーパーバイザー兼任）が構成され、GSAP 作成の大学院生 2 名とともに 4 名の教員が SAPWS に参加した。

SAP でとりあげる大学教員の活動は AP と同じく活動全般、つまり教育、研究、管理運営および社会貢献であり、これらの諸活動についての包括的な業績評価資料および自己省察を促す方法として利用できる。本文 15~20 ページに記述を裏付ける根拠資料（エビデンス）が添付されるという構造も AP と同様である。

SAP と AP の大きな違いは、その作成方法と基本構成にある。作成方法に関して、AP は、まず、TP 作成済であることが前提であり、TP の凝縮版に研究、管理運営および社会貢献活動とこれらの統合に関わる記述が追加される形式で作成される。したがって、AP は、TP 作成期を含めると完成までに一般的な 3 日間のワークショップに 2 回参加する必要がある。

一方の SAP は、TP 作成を SAP 作成の前提とせず 3 日間の WS でいわば一気に作成される。これは大学院生が 3 日間の WS で GSAP を作成するのと同じプロセスである。両者の短期間での作成を可能にしているのは、事前課題である SAP チャート（図 1）および SAP の基本構成の明確な提示にある。SAP チャートとは、GSAP チャートとほぼ同じ構成をとり、SAP 作成の準備として活動全体の俯瞰と振り返りを目的として作成されるものである。

APWS においても、ワークショップの最初に活動全

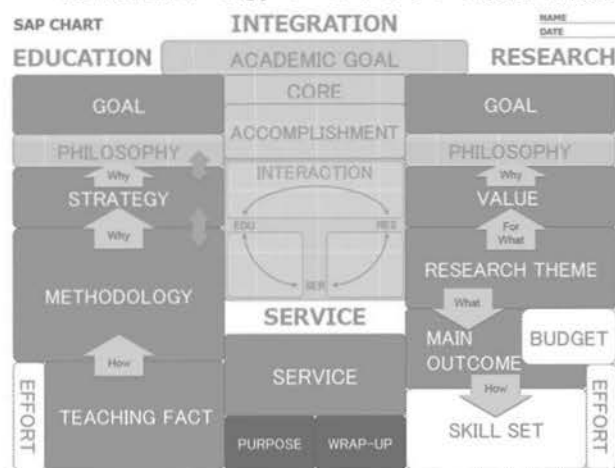


図 1 SAP チャート

体を俯瞰するために三相図[5]の作成が行われているが、作成者の自由度が大きい。一方、SAP チャートはSAPの構成要素が図1のように構造化され、それがSAPの基本構成と対応している点が特徴である。メンティーはスタートアップシートとともにこのSAPチャートの作成を行うことで、自分の活動全体をふりかえり、考え方や理念、および関係ない事象の関連性などに気づく機会を得る。

SAPWS では、スタートアップシートおよびSAPチャートを参照しながらメンタリングが進められ、体調不良によるWSの途中離脱者1名を除き3名がSAPを完成させた。なお、今回のメンティーは予め3時間のSAPチャートの作成WSを開催し、WSにおいてチャート作成を行った上でこのSAPWSに参加している。

SAPは通常のAP作成と比較すると短期間で作成できることが大きな特徴である。GSAP開発時には、大学院生は大学教員よりも振り返る活動が少なく、活動に対する責任も教員のように負っていないことから、短期間で作成が可能と考えられていたが、今回、大学教員を対象とするSAPがこのWS期間で実際に作成されたことは、SAP利用の実効性の実証に寄与するものであるといえよう。ただし、今回のWSでのSAP作成者は3名であり、数としては少ないことから、今後もこの日程で十分なのか、また、より短い時間で高品質の高いSAPを作成する改善案がないかどうかについては、検討していく必要があるだろう。

5.1 SAPのスーパーバイザーとして

栗田佳代子 今回、SAPおよびGSAPのメンターチームのスーパーバイザーを担当した。SAP、GSAPともにメンティーはスタートアップシートだけでなくチャートを作成していることから、メンティーは自身の活動の全体像を比較的良好に整理できており、また、メンターもそれが構造として把握できるため効率のよいメンタリングが実現されていたように感じる。つまり、メンタリングにおいて、メンティーの活動の事実確認に対して必要以上に時間を費やすことなく、深い理念やコアなどへの気づきに、より時間をかけられたということといえる。また、チャートを使ったメンタリングを通して、チャート作成でメンティーが要素として明示的にあげなかった背後にあるエピソードなどが重要であることが明らかとなったため、今回のSAPWSはチャートの改善にもつながった。具体的には、そのような重要な要素を考えて記述することがチャート作成の一プロセスとして組み入れられた。また、メンタリングにおけるチャートの利用方法は各メンターに一任

されていたことから、チャートの効果的な利用方法については、今後、検討の余地があるだろう。

今回3名がSAPをこの3日間のWSで作成したことの意義は大きい。従来APは、「TPを作成してからAP作成」という2段階の作成プロセスであった。これは、日本ではまず、教育業績の可視化と自己省察が重要であることと、AP作成のためにアメリカで行われているような4日を超えるWSを実現しづらいことが理由による。しかし、この方法は、教育だけでなく活動全体を扱いたい教員や研究志向の教員にとっては負担感を感じさせるものであった。今回のSAPは最初から活動全般を扱い、短期間で作成できることから、これまでよりも、作成へ一歩踏み出しやすい環境を整えたといえることができるだろう。ただし、今回の作成者は比較的キャリアの浅い若手であったため、活動が幅広く経験の多いシニア教員が作成できるのか、また、先述のようにチャートをメンタリングにおいてどう効果的に活用するのか、などの検討課題はあり、今後もSAPWSの回数を着実に重ねていくことが望まれる。

6. おわりに

本稿では、大阪府立大学高専の2014年度に開催したAP作成WSについて報告した。2015年度のAPメンティー、メンター、スーパーバイザーになられる方の参考になれば幸いである。今後はTPだけではなくAPこそが本校を発祥とする教育改善のルーツになればと願う。これまでの目標に対し執筆がおくれているが、近年中にこれらの報告をまとめ、アカデミック・ポートフォリオの著書として発刊する予定である。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 20234263 の助成を受けたものです。

また、今回は拙著に寄稿していただいた県立広島大学保健福祉学部作業療法学科吉川ひろみ教授および東京純心大学看護学部看護学科竹元仁美教授に感謝したい。

参考文献

- [1] 北野ほか、日本初単一教育機関内ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して、大阪府立高専研究紀要、第43巻、pp.63-70(2009)、金田ほか、日本初単一教育機関内アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して、大阪府立高専研究紀要、第46巻、pp.71-76(2012)、東田ほか、2012年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告、大阪府立大学

工業高等専門学校研究紀要,第47巻,pp.43-48(2013). 2013年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告, 東田ほか, 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要,第48巻,pp.37-42(2014).

[2] ピーター・セルディン, J.エリザベス・ミラー著, 大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳, アカデミック・ポートフォリオ, 玉川大学出版部(2009).

[3] 吉田壘・栗田佳代子, 大学院生版アカデミック・ポートフォリオの開発, 日本教育工学会論文誌, 39(1),

pp.1-11 (2015).

[4] 吉田壘・栗田佳代子, 構造化アカデミック・ポートフォリオの開発, 日本教育工学会研究報告集 14(4), pp.15-21(2014).

[5] 栗田佳代子, 秦敬治, 竹元仁美, 皆本晃弥, 山内一祥, 東田卓, 金田忠裕, 本田知巳, 大学教員のポートフォリオのこれから, 第19回京都大学教育研究フォーラム, 京都大学, 2013.3.14-15 (2013).